



Title	「死後の世界を信じること」と幸福感：JGSS-2008の分析
Author(s)	寺沢, 重法; 横山, 忠範
Citation	宗教と社会貢献, 4(2), 1-25
Issue Date	2014-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57049
Rights	『宗教と社会貢献』（ISSN:2185-6869）は、創刊号より最新号まで大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive)にて全文公開いたします。
Rights(URL)	http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html
Type	journal article
File Information	rsc0402-02terazawa-yokoyama.pdf



Title	「死後の世界を信じること」と幸福感 : JGSS-2008 の分析
Author(s)	寺沢, 重法; 横山, 忠範
Citation	宗教と社会貢献. 4(2) P.1-P.25
Issue Date	2014-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/50281
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

「死後の世界を信じること」と幸福感

—JGSS-2008 の分析—

寺沢重法*・横山忠範†

Belief in Life-After Death and Happiness in Contemporary Japan Analyses of JGSS-2008

TERAZAWA Shigenori, YOKOYAMA Tadanori

論文要旨

本稿の課題は、「現代日本において「死後の世界を信じること」と幸福感の間にはどのような関係が見いだされるのか」という問いに、日本版 General Social Surveys (JGSS-2008) の探索的分析を通じて答えることである。知見は以下の通りである。①社会—人口学的諸変数および宗教属性を統制した上でも、死後の世界を信じる男性の回答者の幸福感は有意に高いことが明らかになった。②「死後の世界を信じること」は相対的世帯収入の低い回答者に対してのみストレス緩衝効果をもつことが明らかになった。③男女別も分析を行ったところ、男性については、「死後の世界を信じること」と幸福感の間の正の有意な関連と相対的世帯収入が低い回答者へのストレス緩衝効果が確認されたが、女性についてはいずれも確認されなかった。

キーワード 幸福感、死後の世界、ストレス緩衝効果、社会階層、JGSS-2008

This study uses data from the 2008 Japanese General Social Survey (JGSS-2008) to examine how *belief in life-after death* and happiness are related in contemporary Japan. Major findings are as follows: 1) *belief in life-after death* and happiness are positively and significantly related with the net effect of socio-demographic variables in the male sample; 2) *belief in life-after death* has stress buffering effects on male respondents who thought that their incomes are relatively low; 3) when the same analyses were conducted on the female portion of the sample, the positive and significant relationship between belief in life-after death and happiness and the stress buffering effects on lower income respondents were not found.

Keywords: Happiness, Belief in Life-After Death, Stress Buffering Effect, Social Stratification, JGSS-2008

* 北海道大学大学院 文学研究科・助教 shterazawa@let.hokudai.ac.jp

† 北海道大学大学院 文学研究科・博士前期課程 tadaodori@yahoo.co.jp

1. 問題設定

本稿の課題は、「現代日本において「死後の世界を信じること」と幸福感の間にはどのような関係が見いだされるのか」という問いに、全国規模のサンプリングデータの分析を通じて答えることである。

デュルケムが『自殺論』[Durkheim 1897 (=宮島訳 1985)]で所属教派と自殺率の関係を論じて以来、多くの社会学者・社会心理学者が、宗教性とメンタルヘルスの関係について関心を寄せてきた[Breault 1986; Pescosolido and Georgianna 1989; Pope and Danigelis 1981; Liu et al. 2012]。特に 1980 年以降、様々な社会・人口学的変数や健康関連変数を統制した上でも、宗教性とメンタルヘルスの間に有意な独自の関連が残ることが様々な研究者によって指摘されてきた[George et al. 2002; Koenig et al. 2012]。本稿で取り上げる幸福感についても同様に宗教性との関連が指摘されている[Andrews and McKennell 1980; Koenig et al. 2001; Myers 1993]。また幸福感自体が主観的ウェル・ビーイングや心理的ディストレス（悲嘆、苦悩）の指標として用いられるようになっている[Mirowsky and Ross 2003]。

宗教性と幸福感に関する研究には、現在 2 つの展開がある。1 つは幸福感に対する多面的宗教性の影響を検討する流れである。従来の研究は所属教派の違いや教会出席などの宗教集団とのかかわりと幸福感の関係を分析するにとどまっていたが、近年はより多面的な宗教性と幸福感の関連が検討されるようになり、実際に様々な宗教性と幸福感の関係が明らかにされている[Koenig et al. 2012]。だが、多面的宗教性に目が向けられながらも、たとえば宗教的信念 (religious belief) と幸福感の関係については未だ十分に検討されていない[Schieman 2011]。ここでいう宗教的信念とは、神や悪魔などの超人的な存在や天国や地獄など死後の世界、超自然的な現象の存在を信じていることである[Schieman 2011]。そうした状況のなか Schieman [2011] は、宗教的信念として「神を信じること」(belief in God) と「死後の世界を信じること」(belief in life after death) とメンタルヘルスの関係を実証的研究していくことの重要性を指摘している。

もう 1 つの展開は、アジア圏における宗教性と幸福感の関係に関する実

証的研究の広がりである。多くの先行研究はアメリカを中心とした欧米・キリスト教文化圏における宗教性と幸福感の関係を論じてきたが、非欧米・非キリスト教文化圏における宗教性と幸福感の関係については十分に論じられてこなかった [Bradshaw and Ellison 2010 ; Koenig et al.2012 ; Liu et al.2012]。しかしながら近年は台湾や中国といった東アジアにおける宗教性と幸福感の関係も徐々に明らかにされてきている [范・蕭 2012]。たとえば Liu et al. [2012] らは「台湾社会変遷基本調査」(Taiwan Social Change Survey) の分析から、台湾においては絶対神を信じることは幸福感に対して負の関係をもつが、健康状態が悪い人に対してはストレス緩衝効果をもつこと、また祈りや感謝が幸福感と正の関係にあること、一方、輪廻転生を信じることや寺院などを訪れる頻度は幸福感に対して有意な関係をもっていないことを明らかにしている [Liu et al.2012]。さらに Liu et al. [2010] は 2007 Spiritual Life Study of Chinese Residents の分析から、中国においては因果的運命論（「前世の行いで現世の禍福が決まる」など）と幸福感の間に正の関係が見いだされることを明らかにしている。

このように近年の宗教とメンタルヘルスをめぐる実証研究においては、宗教的信念への着目が重要であるとともに、台湾や中国などの東アジア地域において宗教的信念と幸福感の様々な関係が見いだされるようになってきていると言えるだろう⁽¹⁾。

以上の2つの研究動向を踏まえて、本稿では、現代日本を対象として、宗教的信念の指標である「死後の世界を信じること」を取り上げ、冒頭で述べた「現代日本において「死後の世界を信じること」と幸福感の間にはどのような関係が見いだされるのか」という問いに答えることを課題とする。

本稿には2つの意義があると思われる。第1に現代日本は東アジア地域に属し、クリスチャン人口が少ない一方、各種民間信仰や神道、仏教が主流宗教を占めている。また宗教団体への所属や宗教施設への参加よりも、集団や組織を前提としない宗教行為が主流である [Miller1995 ; Roemer 2010]。このような点で、現代日本は東アジアにおける「死後の世界を信じること」と幸福感の関係を検討するうえで興味深い地域であると思われる。

第2に、近年、日本における宗教性と幸福感の関連を検討したいくつかの研究が発表されている [金児 2004 ; Roemer2010 ; 宍戸・佐々木 2011・

Terazawa2012]。しかし、こうしたメンタルヘルスの関係に関する実証研究はまだ緒に就いたばかりであり、実証的知見の蓄積は必ずしも十分とは言えない [金児・金児 2005 ; 金児 2011]。特に日本の場合、信仰の有無のような自覚的な宗教性ではなく「無自覚の宗教性」を検討する必要性が指摘されているが [稲場 2011]、日本の宗教性と幸福感を論じた実証研究は自覚的な宗教性を取り上げる段階にとどまっている [Roemer 2010 ; 宍戸・佐々木 2011]。したがって本稿で取り上げる「死後の世界を信じること」が「無自覚の宗教性」に関連する宗教性であるとすれば、本稿は「無自覚の宗教性」と幸福感の関係を十分に取上げてこなかった先行研究の空白部分をいくばくか埋めるものになると思われる。

以下、次章では先行研究の整理を行い、第 3 章では本稿で使用するデータ・変数・分析方法を説明する。第 4 章では分析結果を提示し、最後に第 5 章で知見の要約と議論を行う。

2. 先行研究の整理

2.1 「死後の世界を信じること」と幸福感はどのように関連するか

Ellison らによる一連の研究によると [Ellison and Gay 1990; Ellison et al. 1989]、宗教性は以下の 4 つのメカニズムを通じて主観的健康観を向上させるとされる [Liu et al.2010]。①特定の宗教・教派に所属することで教条的同一性のある宗教的コミュニティに統合され、その宗教・教派に特有のライフスタイルが形成され、所属者の生活の質の評価に影響を与える。②宗教施設（特に教会）へ参加することによって宗教施設内での宗教的ネットワークへの接触が生まれ、その結果としてソーシャル・サポートを得る機会が増加する。③祈り、瞑想などの宗教行為を実践することによってセルフ・エスティームと自己効力感が向上し、日常生活の様々な出来事や生活上の問題、ストレスにより上手く対処できるようになる。④宗教的信念が観念的統一感と意味づけの資源を提供する。本稿で取り上げる「死後の世界を信じること」はこの中の④に相当するといえよう。

それでは「死後の世界を信じること」はどのような意味づけを提供することで幸福感を高めるのだろうか。「死後の世界を信じること」は、現世を

より大きな見取り図の中に見出すことを可能ならしめる認知的枠組みを提供するとされる。具体的には、命は現世だけでは終わらないものとみなさせるような認知的枠組み、現世で生じる様々なイベントを来世も含めたより大きな局地から解釈する認知的枠組みを提供する。そして現世を来世の前段階とする認識をもつことで、現世での健康や経済的困難などのストレスも取るに足らないものであるとする再解釈を与え、その結果、精神的安定感の高まりや不安感の軽減をもたらすという [Bradshaw and Ellison2010 ; Schieman2011]

また宗教性は、様々なストレスに直面した際に情緒的コーピングを提供するとされる [Ellison 1991 ; Ellison and Gay 1990; Ellison et al. 1989]。「死後の世界を信じること」がコーピングとなるのは以下の 2 点である。①死後の世界を信じることによって死をより望ましいものと再評価できるようになる、②「死後の世界を信じること」は宗教的信念の重要な一部分をなしているため、「死後の世界を信じること」で様々な宗教的コーピングに触れる機会を増加させる [Bradshaw and Ellison2010 ; Schieman2011]。このように「死後の世界を信じること」で何らかのストレスを緩衝することができるといわれている（ストレス緩衝効果）。

実際に「死後の世界を信じること」とメンタルヘルスの関係はいくつかの研究で検証されている。たとえば Ellison et al. [2009] は、アメリカの全国調査データの分析から、死後の世界を信じていると回答した回答者は不安感が低く、生活満足度や精神的安定感が高いことを明らかにしている。また Flannelly et al. [2006、2008] はアメリカの全国調査の分析から、死後の世界を信じていると回答した回答者は不安感、抑鬱感、強迫観、妄想、恐怖感、自己防衛が低いことを明らかにしている。さらに、Bradshaw and Ellison [2010] による 1998 年の General Social Survey の分析からは、「死後の世界を信じること」はディストレスを低下させるとともに、客観的収入が低い人および主観的収入が低い人に対してストレス緩衝効果をもつことを明らかにしている。一方で信仰のなかで死後の世界が最も重要であると答えた回答者は、抑鬱感とディストレスが高いという指摘もある [Alvarado et al.1995]。

2.2 日本人の宗教性における「死後の世界を信じること」の位置

金児暁嗣による日本人の宗教性についての一連の心理学的研究によると、日本人の宗教性は①向宗教性（一般的な意味での宗教に対しての好意的態度など）②加護（報恩）観念（風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつき、「オカゲさま」といった恩情観など）③靈魂（応報）観念（靈的存在や輪廻転生を信じること、タタリや罰を与えたりするような人を超えた存在に対する畏怖の念、現世利益など）という 3 つの因子から構成されている [Kaneko 1990 ; 金児 1993]。そして、これらの中の加護観念と靈魂観念は、日本人の心の深層に隠れている原始的心性であり、当人もそれを宗教だとは通常意識しない宗教性であるという [金児・金児 2005]。本稿で取り上げる「死後の世界を信じること」はこれらのなかの③靈魂（応報）観念と重なるものである。

なお上述した先行研究における「死後の世界を信じること」のもつ様々な意味は、金児の①向宗教性や、特に②加護（報恩）観念とも少くない関係性を推測できる。例えば、お盆行事は②に当たることになるが、先祖を自宅に迎えるという、日本人独特の死後観を「死後の世界を信じること」ととらえると、①や③の因子も無視できないともいえる。本稿が特に③靈魂（応報）観念に着目するのは以下の理由による。

まず上述したように近年の東アジアにおける宗教性と幸福感に関する研究においては、何らかの形で「死後の世界を信じること」に焦点があてられている。たとえば輪廻転生 [Liu et al.2012] や因果的運命論（「前世の行いで現世の禍福が決まる」など） [Liu et al.2010] である。上記①②③の中で、こうした関心とより直結するのは③靈魂（応報）観念であり、本稿では特にこれに着目することで、日本版の知見を提供しようとしている。

次に日本の社会状況を考えた場合、少子高齢化の進展に伴い日本全体に占める高齢者割合が増加傾向にある。死期に近い高齢者が抱える様々な将来的な問いの中では、上記①②③の中でも、特に自分や配偶者が死んだらどうなるのか、来世で幸福になれるか、死後の自分の供養は無事行われていくのだろうか、そもそも死後の魂や来世というものがあるのかどうか、といった③に関わる問いが少なからぬ位置を占めると思われる。

そして日本の人口構成における高齢者の占める割合が増加していけば、

その分だけ「死後の世界を信じること」を含む霊魂（応報）観念というものが、日本人の社会意識の大きな部分を占めるようになっていられる。そうすると日本人の幸福感を検討する場合、特に「死後の世界を信じること」を含む霊魂（応報）観念に着目することには大きな意味があると思われる。

本稿ではサンプルを高齢者に限定せず、全年齢層を対象としている。全年齢層における傾向を確認しておくことは、たとえば今後高齢者を対象とした分析を行う際の参照点にもなりうると思われる。

また消極的な理由としてはデータセットの限界があげられる。本稿で使用する日本版 General Social Surveys はサンプル数が大きく、かつ社会—人口学的変数を中心に多様な設問を含んだ極めて利用価値の高い二次データである。しかし宗教的信念に関する設問としては「死後の世界を信じること」しか組み込まれていない。加護観念などのより多面的な宗教性については分析できず、「死後の世界を信じること」のみを取り上げざるを得なかった。

ただし近年は日本版 General Social Surveys に加え、台湾の Taiwan Social Change Survey、韓国の Korean General Social Survey、中国の Chinese General Social Survey という各地域で実施されている同種の調査の設問の一部を組み合わせる形で East Asia Social Survey (EASS) という東アジア国際比較調査も行われている。今後の EASS で「死後の世界を信じること」が設問として組み込まれた場合、東アジアの国際比較が可能となる。そうした場合、本稿の知見が参照点にもなりうると考えている。

なお特に霊魂（応報）観念の中で、「死後の世界を信じること」を取り上げることに付言する。金児の因子分析の結果によると、霊魂（応報）観念を構成する 6 つの項目⁽²⁾の中で「死後の世界を信じること」の因子負荷量が相対的に高かった（金児 1991）。そのため霊魂（応報）観念の尺度として、便宜的に「死後の世界を信じること」のみを用いたとしても、霊魂（応報）観念はある程度十分に測定できていると考えられる。

2.3 宗教性と幸福感に関する日本の知見の整理

現在までのところ「死後の世界を信じること」と幸福感の関係を取り上げた実証研究は管見の限り見当たらない。そのため「死後の世界を信じること」に限定せずに、幅広い宗教性と幸福感の関係を分析した先行研究の

知見を整理する〔金児・金児 2005；金児 2011〕。

宍戸・佐々木〔2011〕は JGSS 累積データ 2000-2010 の分析から、信仰度（どの程度熱心に信仰しているか）が日本人の幸福感に正の有意な関連をもっていることを明らかにしている。Roemer（2010）は JGSS 累積データ 2000-2005 を用いた分析から、諸変数を統制した上でも、無宗教に比べて何らかの宗教性をもっていることおよび信仰度が幸福感と正の有意な関連があること、そして非就労者および階層帰属意識の低い回答者に対して信仰度がストレス緩衝効果をもつことを示している。金児（2004）は ISSP の宗教モジュールデータの分析から、低階層者において制度的宗教への関与（宗教施設に行く頻度など）が幸福感のストレス緩衝効果をもつことを明らかにしている。渡辺・黒崎・弓山〔2011〕は、日米比較調査から共通する普遍的宗教性を見出し、神に関する概念と幸福感の関係を調べると、人格的な神概念は幸福度に正の効果を、非人格（原理）的な神概念は幸福度に負の関係をもつことを明らかにしている。一方、Terazawa〔2012〕は、JGSS 累積データ 2000-2008 の分析から、20～59 歳の男性においては、宗教属性（何の宗教を信仰しているのか）と幸福感の間には有意な関連が見いだされないとともに、個人の信仰としての伝統宗教は相対的収入が低い回答者の幸福感をわずかに低下させていることを明らかにしている。

2.4 「死後の世界を信じること」と他の宗教性の関連

「死後の世界を信じること」と幸福感の関連の背後にある真の変数として、「死後の世界を信じること」以外の何らかの宗教性についても検討しなければならない。前節に述べたように、宗教属性や信仰度が幸福感に関連していることがいくつかの実証研究において指摘されているからである〔金児 2004；Roemer2010；宍戸・佐々木 2011；Terazawa2012〕。

また死後の世界を信じることと宗教の関連も報告されているためである。たとえば松谷〔2004〕は JGSS-2000 をもちいて日本の伝統宗教を「無宗教」層・「家の宗教」層・「信者」層という 3 グループにカテゴライズし、様々な社会意識との関連を検討した。その結果、後ろのカテゴリーに行くほど死後の世界を信じる傾向があったことを指摘している。

以上のことから、死後の世界を信じることと幸福感の関連を検討する場合には、死後の世界を信じることの他にも何らかの形で宗教性の効果をコ

ントロールする必要があるといえるだろう。

3. データ・変数・分析方法

3.1 データ

本稿では、2008 年に実施された日本版 General Social Surveys（以下 JGSS-2008）を使用する。JGSS-2008 は全国の 20～89 歳の男女を対象に、層化二段無作為抽出法で調査を行ったものである。本稿で用いるのは JGSS-2008 の A 票である。

JGSS-2008 の使用理由は以下の 3 点である。①死後の世界を信じるかどうかについての設問が含まれていること、②健康状態の悪さや相対的世帯収入の低さなどのストレスに関する変数が含まれており、死後の世界を信じるかどうかということがそれらのストレスに対してストレス緩衝効果が検討できること、③比較的新しいデータセットであること（2000 年実施の JGSS-2000 と 2001 年実施の JGSS-2001 にも、死後の世界について JGSS-2008 と同じ設問が設けられている）。

もちろん JGSS-2008 には限界もある。第 1 に JGSS-2008 はクロスセクションデータであるため、因果関係そのものは明らかにできないことである。本稿で明らかになるのは因果関係を想定した「関連」であることに留意する必要がある。第 2 に「死後の世界を信じること」の測定方法の粗さである。JGSS-2008 は日本人の意識と行動を幅広く取り上げた総合調査であり、宗教調査ではない。後述する通り「死後の世界を信じること」は 1 尺度のみで測定されている。

しかしながら、JGSS-2008 は全国規模のサンプリング調査であり、かつ先述した 3 つの利点を有するため、こうした限界を犠牲にしたうえでも分析に値するデータであると判断した。

3.2 変数

【従属変数】従属変数として使用する設問の質問文は「あなたは、現在幸せですか。」であり、選択肢は「1：幸せ」～「5：不幸せ」の 5 件法である。変数名は「幸福感」とした。

【独立変数】独立変数として使用する設問の質問文は「あなたは、死後の世界を信じますか。」であり、選択肢は「1：はい」「1：いいえ」「2：わからない」である。分析では「1：はい」を1、「2：いいえ」と「3：わからない」を合わせて0とした。変数名は「死後の世界」とした。

【コントロール変数】「実年齢」「性別」（女性＝1）「市郡規模」「教育年数」「非就労」「無配偶者」「健康状態」「相対的世帯収入」「トラウマ経験」「世帯年収」「宗教属性」をコントロール変数として使用した。「実年齢」と「性別」以外のコントロール変数の変数作成方法は以下の通りである。

「市郡規模」は、「大都市」「人口 20 万人以上の市」「人口 20 万人未満の市」を1、「町村」を0とした。

「教育年数」については卒業学校に対して以下のような数値を割り当てた。「旧制尋常小学校」＝7、「旧制高等小学校」＝8、「旧制中学校・高等女学校」＝11、「旧制実業・商業学校」＝11、「旧制師範学校」＝11、「旧制高校・専門学校・高等師範学校」＝14、「旧制大学・大学院」＝17、「新制中学校」＝9、「新制高校」＝12、「新制高専」＝14、「新制短大」＝14、「新制大学」＝16、「新制大学院」＝18。

「非就労」は先週の就労状況について「仕事をしていない」を1、「仕事をした」「仕事をもっているが、病気、休暇などで先週は仕事を休んだ」を0とした。

「無配偶者」は「離別」「死別」「未婚」「離婚を前提に別居中」「同棲中」を1、「現在、配偶者がいる」を0とした。「健康状態」の質問文は「あなたの現在の健康状態はいかがですか。」であり、選択肢は「1：良い」～「5：悪い」の5件法である。

「相対的世帯収入」の質問文は「世間一般と比べて、あなたの世帯収入はどれくらいですか。」であり、選択肢は「1：平均よりかなり少ない」「2：平均より少ない」「3：ほぼ平均」「4：平均より多い」「5：平均よりかなり多い」である。分析に際しては5が「平均よりかなり少ない」、1が「平均よりかなり多い」となるように値を反転させた。

「トラウマ経験」の質問文は「過去5年間に、深く心に傷を受けるような衝撃的なできごと（例えば、離婚、失業、大きな病気やケガ、身近な人の死）を何回経験しましたか。」であり、選択肢は「0：なし」「1：1回」「2：2回」「3：3回」「4：4回以上」である。分析では「0：なし」を0、それ以

外の回答を 1 とした。

「世帯年収」は「0-349 万円」「350-649 万円」(＝基準カテゴリー)「650-999 万円」「1000 万円以上」「DK・NA」にカテゴリー化した。

「宗教属性」の質問文は「信仰している宗教はありますか。」であり、この質問文に対して、「ある」(以下「個人の宗教」)、「特に信仰していないが、家の宗教はある」(以下、「家の宗教」)、「ない」(以下、「無宗教」)の中から 1 つだけ選択する方式が採択されている。さらに、この設問に対して、「個人の宗教」もしくは「家の宗教」と回答した人に対しては、さらにサブクエスションでその宗教名の回答を求めている。この宗教名をもとに「伝統宗教(個人)」「伝統宗教(家)」「キリスト教」「新宗教」「その他の宗教」「無宗教」(＝基準カテゴリー)という 4 つのカテゴリーを作成し、「宗教属性」という変数を作成した。

各カテゴリーの内訳は以下の通りである(「わからない」と無回答は欠損値処理)。「伝統宗教(個人)」「伝統宗教(家)」は「神道」「仏教+神道(仏様・神様)」「先祖供養」「仏教」「禅宗(曹洞宗・臨済宗)」「天台宗」「浄土宗」「浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿弥陀仏)」「真言宗」「日蓮宗」「時宗」「法華経・法華宗」「日蓮正宗」から構成される[松谷 2004]。「キリスト教」は「キリスト教」「カトリック」「プロテスタント」から構成される。「新宗教」は「大山ねずの命神示教会」,「エホバの証人」「世界救世教」「統一教会(世界基督教統一神霊協会)」「創価学会」「立正佼成会」「霊友会」「幸福の科学」「崇教真光・真光」「天理教」「真如苑」「神幽現救世真光文明教団」「PL 教団」「霊波之光」「生長の家」「金光教」「黒住教」から構成される[Roemer 2010]。「その他の宗教」は「その他」から構成される。

分析に使用した変数の基本統計量は表 1 にまとめてある。

表 1 変数の基本統計量

	最小値	最大値	平均／%	標準偏差
幸福感	1	5	3.919	0.945
死後の世界	0	1	20.8%	
実年齢	20	89	52.596	16.261
性別(女性=1)	0	1	51.9%	
市郡規模(都市=1)	0	1	87.3%	
教育年数	6	18	12.640	2.460
非就労	0	1	35.4%	
無配偶者	0	1	26.3%	
健康状態	1	5	2.371	1.114
相対的世帯収入	1	5	3.362	0.862
トラウマ経験	0	1	61.4%	
世帯年収				
0-349万円	0	1	20.1%	
350-649万円(基準カテゴリー)	0	0	24.9%	
650-999万円	0	1	18.1%	
1000万円以上	0	1	8.8%	
DK・NA	0	1	28.2%	
宗教属性				
伝統宗教(個人)	0	1	5.1%	
伝統宗教(家)	0	1	26.0%	
キリスト教	0	1	1.0%	
新宗教	0	1	4.5%	
その他の宗教	0	1	0.4%	
無宗教(基準カテゴリー)	0	0	63.0%	

(N=1872)

3.3 分析方法

分析方法については、従属変数が 5 件法の順序尺度であるため順序ロジット分析を使用した。まず独立変数とすべての従属変数を投入したモデルの分析を行い(モデル 1)、次に独立変数といくつかの統制変数の交互作用項を投入したモデルの分析を行う(モデル 2～モデル 6)。最後に補足分析としてモデル 6 の男女別分析を行った。なお交互作用項の作成に当たっては、多重共線性を避けるために元の変数を標準化した上で交互作用項を作成した。分析には Stata10 を使用した。

4. 分析結果

4.1 幸福感に対する「死後の世界を信じること」の効果

表 2 に分析結果をまとめてある。モデル 1 では「死後の世界」は係数が正で有意である ($b=0.291$, $p<.05$)。このことから、死後の世界は存在しない、もしくは存在するかどうかはわからない、と考える回答者に比べて死後の世界は存在すると考えている回答者の方が幸福感が高いことが窺われる。

コントロール変数についても若干検討しておく。まず「実年齢」「性別」「無配偶者」「健康状態」「相対的世帯収入」「トラウマ経験」「その他の宗教」が統計的に有意な結果を示した。関連の様子を詳しく見てみると、年齢が高い回答者 ($b=0.015$, $p<.001$) と女性 ($b=0.218$, $p<.05$) の幸福感が高い。また「無宗教」に比べて「その他の宗教」を信仰している回答者 ($b=1.517$, $p<.05$) の幸福感も高い。一方、無配偶者 ($b=-0.657$, $p<.001$)、健康状態の悪い回答者 ($b=-0.550$, $p<.001$)、相対的世帯収入が低い回答者 ($b=-0.388$, $p<.001$)、トラウマ経験者 ($b=-0.216$, $p<.05$) は幸福感が低い。これら 4 つの変数は、回答者の幸福感を下げるストレスターだと考えられる。

関連の強さについて、まず正の関連を示した変数の関連の強さを見てみると、強い順に「その他の宗教」「死後の世界」「性別」「実年齢」となっている。ただし「その他の宗教」はケース数が 10 以下のため結果が不安定になっている可能性も高い。そこで「その他の宗教」を除いて関連度を比べてみると「死後の世界」がこのモデルの中では幸福感に最も強い関連をもっていることがわかる。一方、負の関連を示した変数の関連の強さを見てみると、強い順に「無配偶者」「健康状態」「相対的世帯収入」「トラウマ経験」となっている。

表2 「死後の世界」と幸福感の順序ロジット分析 (数値は係数)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6
死後の世界	0.291 *	0.115 *	0.119 *	0.127 **	0.121 **	0.126 **
実年齢	0.015 ***	0.014 ***	0.015 ***	0.014 ***	0.015 ***	0.014 ***
性別 (女性=1)	0.218 *	0.222 *	0.217 **	0.227 **	0.218 *	0.228 *
市都規模 (都市=1)	0.218	0.222	0.220	0.225	0.216	0.229
教育年数	0.010	0.009	0.010	0.009	0.010	0.008
非就労	0.189	0.197	0.190	0.185	0.190	0.195
無配偶者	-0.657 ***	-0.293 ***	-0.289 ***	-0.287 ***	-0.289 ***	-0.289 ***
健康状態	-0.550 ***	-0.613 ***	-0.612 ***	-0.613 ***	-0.611 ***	-0.615 ***
相対的世帯収入	-0.388 ***	-0.332 ***	-0.336 ***	-0.335 ***	-0.337 ***	-0.332 ***
トラウマ経験	-0.216 *	-0.107 *	-0.105 *	-0.103 *	-0.106 *	-0.106 *
世帯年収 (350-649万円=ref)						
0-349万円	-0.160	-0.158	-0.158	-0.153	-0.161	-0.148
650-999万円	-0.098	-0.091	-0.097	-0.089	-0.096	-0.080
1000万円以上	-0.055	-0.040	-0.054	-0.044	-0.055	-0.028
DK・NA	-0.041	-0.028	-0.041	-0.043	-0.041	-0.029
宗教属性 (無宗教=ref)						
伝統宗教 (個人)	0.255	0.264	0.253	0.264	0.254	0.267
伝統宗教 (家)	-0.003	-0.001	-0.004	-0.004	-0.001	-0.002
キリスト教	-0.396	-0.383	-0.396	-0.398	-0.388	-0.374
新宗教	-0.085	-0.073	-0.086	-0.104	-0.084	-0.094
その他の宗教	1.517 *	1.525 *	1.526 *	1.437	1.528 *	1.471 *
死後の世界 × 無配偶者	—	0.075	—	—	—	0.071
死後の世界 × 健康状態	—	—	-0.018	—	—	-0.029
死後の世界 × 相対的世帯収入	—	—	—	0.107 *	—	0.106 *
死後の世界 × トラウマ経験	—	—	—	—	-0.023	-0.029
カットポイント1	-6.404	-3.573	-3.551	-3.572	-3.556	-3.591
カットポイント2	-4.674	-1.839	-1.821	-1.839	-1.826	-1.856
カットポイント3	-2.447	0.392	0.404	0.394	0.400	0.379
カットポイント4	-0.779	2.062	2.073	2.066	2.069	2.053
LL	-2229.612 ***	-2228.100 ***	-2229.540 ***	-2226.756 ***	-2229.481 ***	-2225.0921 ***
N	1872					

***p<.001 **p<.01 *p<.05

4.2 ストレス緩衝効果の検討

それでは「死後の世界を信じること」との関係は、上記のストレスターの有無によって異なるのだろうか。さらにいえば、「死後の世界を信じること」は上記のストレスターをもつ人々の幸福感を高める「ストレス緩衝効果」をもっているのだろうか。このような関係が成立しているのかを検証するために、モデル2からモデル6では、上記4つのストレスター関連変数（「無配偶者」「健康状態」「相対的世帯収入」「トラウマ経験」と「死後の世界」の交互作用項を作成し、その効果を検討した。まずモデル2からモデル5では交互作用項を1つずつ投入し、最後にモデル6ですべての交互作用項を投入した。

交互作用項を1つずつ投入したモデル2～モデル5の結果を見ると、「死後の世界×相対的世帯収入」のみが統計的に有意であった ($b=0.107$, $p<.05$ (モデル4))。すべての交互作用項を投入したモデル6においても「死後の世界×相対的世帯収入」が統計的に有意であった ($b=0.106$, $p<.05$)。死後の世界が存在すると考えることの幸福感に対する正の効果は、相対的世帯収入の高低によって異なっていることが示唆される。また「死後の世界×

相対的世帯収入」の符号が正であることから、相対的世帯収入が低くてかつ死後の世界は存在すると考える回答者の方が、相対的世帯収入が高くてかつ死後の世界は存在する考える回答者よりも、幸福感が高いことが示唆される。このことから「死後の世界」には相対的世帯収入の低い回答者に対するストレス緩衝効果をもつことが窺われる。

4.3 男女別の分析

最後に補足分析として、男女別にモデル 6 の分析を行ってみた。男女別に分析する理由は、現代日本における幸福感を含む主観的健康の規定要因は男女によって異なり [菊澤 2001 ; 宍戸・佐々木 2011]、幸福感と宗教の関連は男女によって異なることが指摘されているためである [Terazawa2012]。また表 2 から性別の効果の大きさが確認されたことから、男女別の分析結果も見しておく必要があると思われたためでもある。結果は表 3 にまとめてある。

まず男性サンプルの分析結果については、全体サンプルの結果とほぼ同じである。「死後の世界」($b=0.166$, $p<.05$)「死後の世界×相対的世帯収入」($b=0.164$, $p<.05$)ともに正の有意な関連を示している。相対的世帯収入が低いと感じている男性に対して、死後の世界が存在すると信じることがストレス緩衝効果をもっている可能性が示唆される。一方女性サンプルでは「死後の世界」($b=.102$, $n.s$) もいずれの交互作用項 (例: 「死後の世界×相対的世帯収入」 $b=0.099$, $n.s$) も有意ではない。死後の世界を信じるかどうかということは、女性の幸福感に対して明確な関連をもっていないのかもしれない。

表 3 「死後の世界」と幸福感の男女別順序ロジット分析（数値は係数）

	モデル6（男性）	モデル6（女性）
死後の世界	0.166 *	0.102
実年齢	0.011 *	0.014 **
市郡規模（都市＝1）	0.577 **	-0.070
教育年数	-0.031	0.053
非就労	-0.024	0.411 **
無配偶者	-0.574 ***	-0.091
健康状態	-0.651 ***	-0.622 ***
相対的世帯収入	-0.330 ***	-0.343 ***
トラウマ経験	-0.170 **	-0.053
世帯年収（350-649万円=ref）		
0-349万円	-0.105	-0.153
650-999万円	-0.332	0.173
1000万円以上	0.002	-0.098
DK・NA	-0.012	0.000
宗教属性（無宗教=ref）		
伝統宗教（個人）	0.426	0.136
伝統宗教（家）	-0.017	0.018
キリスト教	0.089	-0.711
新宗教	-0.224	-0.061
その他の宗教	0.514	2.390 *
死後の世界×無配偶者	0.020	0.080
死後の世界×健康状態	-0.098	-0.031
死後の世界×相対的世帯収入	0.164 *	0.099
死後の世界×トラウマ経験	-0.043	-0.007
カットポイント1	-3.993	-3.584
カットポイント2	-2.387	-1.598
カットポイント3	-0.010	0.576
カットポイント4	1.646	2.322
LL	-1062.375 ***	-1136.991 ***
N	900	972

***p<.001 **p<.01 *p<.05

5. 要約と議論

本稿の課題は、「現代日本において死後の世界を信じることと幸福感の間にはどのような関係が見いだされるのか」という問いに、全国規模のサンプリングデータの分析を通じて答えることであった。JGSS-2008を用いた順序ロジット分析の結果以下のことが明らかになった。

まず①社会—人口学的諸変数および宗教属性を統制した上でも、死後の世界を信じると答えた回答者の幸福感は有意に高いことが明らかになった。それと同時に、配偶者をもたない回答者、健康状態の悪い回答者、相対的世帯収入が低いと感じている回答者、トラウマを経験した回答者の幸福感は有意に低いことも明らかになった。②そこで死後の世界を信じることがこれら 4 つのストレスに対してストレス緩衝効果をもつのかどうかを検討してみたところ、相対的世帯収入が低いと感じている回答者に対してのみ有意なストレス緩衝効果をもつことが明らかになった。③最後に、補足として男女別の分析を行ったところ、男性については、「死後の世界を信じること」と幸福感の間の正の有意な関連と相対的世帯収入が低い回答者へのストレス緩衝効果が確認されたが、女性についてはいずれも確認されなかった。

以下、得られた知見に対して議論を行いたい。第 1 に「死後の世界を信じること」が幸福感の高さと有意に関連していることが明らかになった。この結果は、「死後の世界を信じること」が様々な領域のメンタルヘルスを高める機能をもつとするアメリカの知見に沿うものである [Ellison et al.2009 ; Flannelly et al.2006、2008 ; Bradshaw and Ellison2010]。また日本における宗教性と幸福感を論じた実証的知見にも沿うものである [金児 2004 ; Roemer2010 ; 宍戸・佐々木 2011]。「死後の世界を信じること」がディストレスや抑鬱感の高さと関連する [Alvarado et al.1995]、あるいは日本では宗教性は幸福感に対して直接効果をもたない [Terazawa 2012] という知見もあるが、本稿は前者の知見に沿うものであるといえる。現代日本では「死後の世界を信じること」と幸福感の高さの間に何らかの関連があることが示唆される。先述したとおり「死後の世界を信じること」は、霊的存在への信仰、人知を超えた存在に対する畏怖の念といった観念の複合体である「靈魂（応報）観念」の下位尺度である [Kaneko 1990 ; 金児 1993]。そのため「死後の世界を信じること」が幸福感の高さと有意に関連しているという結果は、靈魂（応報）観念と幸福感の高さの関連を示唆するものである。

ここで興味深いのは、宗教属性と「死後の世界を信じること」の関係である。Roemer [2010] は無宗教に比べて何らかの宗教属性（仏教、キリスト教、新宗教、その他の宗教）は幸福感が有意に高いことを明らかにして

いる。一方、本稿では「死後の世界」と幸福感の間には、「その他の宗教」を除いて明確な関連は見いだされなかった。「死後の世界」が宗教属性の効果を抑制している可能性も考えられたため、モデル 1 から「死後の世界」を外した分析も行ってみたが、宗教属性の関連はほぼ同じであった（結果の提示は省略）。

また宍戸・佐々木 [2011] では信仰度と幸福感の高さが有意であるという知見が得られていたため、信仰度についても同様の方法で検討してみた。

上記モデル 1 から「死後の世界」を外して信仰度の関連度を見たところ、確かに信仰度と幸福感の高さが有意であった。しかし「死後の世界」を投入したところこの関係は有意ではなくなり、「死後の世界」に正の有意な関連が見いだされた（結果の提示は省略）。

なお信仰度という変数の内訳は以下のとおりである。上述した「宗教属性」の質問文「信仰している宗教はありますか。」に対して「ある」「特に信仰していないが、家の宗教はある」（もうひとつの選択肢は「ない」）を選択した回答者に対して追加で「あなたは、自分が熱心な信者だと思いますか。」と尋ねている。選択肢は「1：熱心である」「2：まあまあ熱心である」「3：そんなに熱心ではない」である。これを 3 が「熱心である」、1 が「そんなに熱心ではない」となるように値を反転させ、さらに「宗教属性」の質問の選択肢「ない」に 0 を割り当てた。

以上のことをまとめて考えてみると、日本においては何らかの宗教属性をもつことや信仰熱心であるということよりも、「死後の世界を信じること」といった基層信仰にかかわる宗教性の方が、宗教性と幸福感の関連を見る際には重要であることが窺われる。

第 2 に「死後の世界を信じること」が相対的世帯収入の低い人に対してストレス緩衝効果をもつ可能性が示唆された。この知見は、Bradshaw and Ellison [2010] による主観的収入が低い人に対してストレス緩衝効果をもつという知見と一致している。日本では低階層者において制度的宗教への関与が幸福感のストレス緩衝効果をもつ [金児 2004]、低階層者と非就労者の幸福感に対してストレス緩衝効果をもつ [Roemer2010] という先行研究の知見に沿うものである。

Bradshaw and Ellison [2010] によれば「死後の世界を信じること」は以下の 3 点で、相対的収入の低い人に対してストレス緩衝効果をもつとされる。

①現世での葛藤や失敗を超越できるような耐性を与えるため、現世での経済的困難に陥ったことに対する耐性も与える。②永遠の生命を手に入れるという信念をもつことで現世での生活環境に対する代替的な見方を与えるため、現世での経済的困難に対しても、それが困難であるという見方をしなくなる。③「死後の世界を信じること」は日常生活での様々な出来事の経験の仕方を変化させる。たとえば、経済的困難を経験している人にとって、日常生活における様々なことは不快な刺激となるが、「死後の世界を信じること」によって、日常生活における些細な出来事を神の祝福だと解釈するようになる。日本における「死後の世界を信じること」が輪廻転生を信じること、現世利益や人知を超えた存在に対する畏怖の念などからなる霊魂（応報）観念の一部であるとするならば [Kaneko1990；金児 1993]、Bradshaw and Ellison [2010] が指摘するメカニズムが日本でも生じているのかもしれない。また霊魂（応報）観念には「仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる」という現世利益意識も含まれている [Kaneko1990；金児 1993]。そうであるならば、相対的世帯収入が低くかつ死後の世界を信じる人は、同時に現世利益意識も高いため、経済的困難を神仏に願いごとをすることで解消できる、あるいは解消できるものであるため経済的困難を取るに足らないものであると認知し、結果、幸福感が高いのかもしれない。

第 3 にストレス緩衝効果についてジェンダー差が確認された。この点は解釈が難しいが、なぜ男性でストレス緩衝効果が確認されたのかという点については、男性に期待される役割が関連していると思われる。「男は仕事、女は家庭」という性別役割規範は男性で高いため [佐々木 2012]、周囲と比較して自分の収入が高いのか低いのかということは特に男性において大きな関心事になると思われる。そうした男性において相対的収入が低いことは重要なストレスとなり、「死後の世界を信じること」がストレス緩衝効果をもつにいたるのではないと思われる。もっともこの点は本稿の分析からはあまり体系的に検証できていない。性別役割規範や職業意識、家事参加状況などの変数を組み込んで、より詳細に検討していく必要があるだろう。

本稿には以下のような限界がある。第 1 に本稿で使用したデータがクロスセクションデータであるため、因果関係そのものの分析ができなかった

ことである。本稿では死後の世界を信じることが幸福感に影響を与えるという因果関係を念頭に置いていたが、逆方向あるいは双方向の因果関係の可能性も否定できない。因果関係をより明確にするためには、今後パネルデータを用いた分析が必要とされる⁽³⁾。

第2に「死後の世界を信じること」が1尺度でしか測定できなかったことである。本稿では比較的最新の全国データであるという利点を生かすため、測定方法の粗さを犠牲にした。しかし死後の世界を信じることの詳細な内実についても検討の必要性がある。たとえば一口に「死後の世界」と言っても、それが浄土宗諸派でいう浄土のことなのか、キリスト教でいう天国・地獄のことなのか、あるいは一部の新宗教教団でいわれる霊界のことなのかは不明である。また「死後の世界を信じること」を靈魂（応報）観念を代表するものとして解釈したが、「死者を供養しないとたたきがあると思う」などの、靈魂（応報）観念に含まれる他の尺度〔Kaneko1900；金児1993〕と幸福感の関連についても検討する必要がある。

第3に「死後の世界を信じること」と幸福感の間を結ぶメカニズムが不明な点である。本稿では、欧米の先行研究の知見を踏まえて死後の世界を信じることによって現世をより大局的な視点から捉える認知メカニズムが発生するという媒介関係を前提として議論を進めてきた。しかしこのメカニズムをより明確にするためには、回答者にとって死後の世界がどのような意味をもつのかについての設問を分析に用いる必要があるだろう。

以上2点目と3点目の限界を乗り越えるためには、日本の宗教心理学で彫琢されてきた様々な尺度〔金児1997；松島2011；西脇2004〕を参考に、別途、調査票調査を行っていく必要があるだろう。

以上のような限界と課題を抱えていながらも、本稿には以下の3つの研究意義があると思われる。

第1に日本においては必ずしも十分な蓄積があるとは言えない宗教性とメンタルヘルスの関係に関する先行研究に対して、「死後の世界を信じること」と幸福感の関連パターンを提示したことである。現代日本にける「死後の世界を信じること」と幸福感の関連パターンについては未だ検討されていないため、本稿はそうした先行研究の空白部分を多少なりとも埋めている。特に非欧米・キリスト教文化圏における「死後の世界を信じること」と相対的世帯収入の関係については、その重要性は指摘されつつも未だ明

らかにされていなかったため [Bradshaw and Ellison 2010]、本稿はその空白部分を埋めたことにもなっている。

第 2 に本稿では、従来の日本の先行研究にのみならず、アメリカで蓄積されてきた実証的知見に沿う部分も見られた（ストレス緩衝効果など）。このことは「死後の世界を信じること」がアメリカと日本の間で機能的等価性をもつ可能性を示している [横井・川端 2013]。今後、「死後の世界を信じること」がどのような社会意識と結びついているかについて日米比較を行いながら、その機能を探索することの意義が示唆されているといえよう [渡辺・黒崎・弓山 2011；横井・川端 2013]。

第 3 に「死後の世界を信じること」がストレス緩衝効果をもつ可能性を提示したことを通じて、現代日本における宗教性と社会階層・社会経済的不平等、特に男性の宗教と社会階層・社会経済的不平等の関係が浮かび上がってきたことである。宗教性と社会階層というテーマはウェーバーやマルクス以来のテーマであり、現在でも欧米の宗教社会学においては宗教性と社会階層に関する実証研究が行われている [Keister et al. (eds.)2012]。さらに近年は社会階層・宗教・メンタルヘルスに関する実証研究も徐々に蓄積されてきている [Schiman 2010；Schieman and Jong 2012；Shieman et al.2003、2006]。一方、日本においては社会階層を組み込んだ実証研究はほとんど行われていない [小堀 2011]。現代日本においてどのような社会階層と関連するのはどのような宗教性なのか、そして宗教性はどのような社会階層の人々にどのように幸福感を与えているのかを明らかにしていく必要があるだろう。本稿はその必要性を示唆していると思われる。

【謝辞】

データの二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJ データアーカイブからデータセットの提供を受けた。日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

本稿は日本学術振興会科学研究費（若手研究 B）「台湾における宗教と利他主義に関する社会学的研究」（研究代表者：寺沢重法）および日本学術振興会科学研究費（基盤研究 B）「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の

比較社会学的研究」(研究代表者: 櫻井義秀)の一貫として行われたものである。

また論文審査の過程において貴重なご指摘・コメントをいただきましたこと、ここに御礼申し上げます。

註

- (1) これら二つの展開以外にも、宗教と幸福感の間の因果関係に関する議論も行われつつある。具体的にはパネルデータ分析を通じて、宗教が幸福感に影響を与えるのか、それとも幸福感が宗教に影響を与えるのかを検討する実証研究が行われつつある [Lim and Putnam2010]。
- (2) 霊魂(応報)観念の内訳は以下の項目からなっている。「死後の世界はあると思う」「死者の供養をしないとたたりがあると思う」「仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる」「水子供養はするべきである」「人は死んでも、くり返し生まれ変わるものだ」「神や仏をそまつにするとばちがあたる」[金児 1991]。
- (3) 本稿の結果からは「死後の世界を信じれば幸せになれる」「自分が不幸せだと感じている人は死後の世界を信じてみればよい」といった政策的提言を導くことはできない。また仮に「死後の世界を信じること」が幸福感を高めるという因果律が確認できたとしても、そこから「死後の世界を信じれば誰もが幸せになれる」という言明を導くことにも無理がある。サンプリング調査で明らかにできるのは、「A という人は B である傾向がある」という傾向であり、当然その傾向に当てはまらない人もいるからである。

参考文献

- Alvarado, K.A., D.I. Templer, C. Bresler, and S. Thomas-Dobson 1995 “The Relationship of Religious Variables to Death Depression and Death Anxiety.” *Journal of Clinical Psychology* 51:202-204.
- Bradshaw, Matt and Christopher G. Ellison 2010 “Financial Hardship and Psychological Distress: Exploring the Buffers Effects of Religion.” *Social Science & Medicine* 71:196-204.
- Breault, Kevin D. 1986 “Suicide in America: A Test of Durkheim’s Theory of Religious and Family Integration. 1933-1980.” *American Journal of Sociology* 92(3):628-56.
- Durkheim, Émile 1897 *Le Suicide* *Le Suicide : Étude de sociologie*, Paris: Félix Alcan, (= 宮島喬訳 1985 『自殺論』中央公論新社)。
- Ellison, Christopher 1991 “Religious Involvement and Subjective Well-being.” *Journal of Health and Social Behavior* 32(80):80-99.
- Ellison, Christopher and David Gay 1990 “Region, Religious Commitment, and Life Satisfaction Among Black Americans.” *Sociological Quarterly* 31:123-147.

- Ellison, Christopher G., David A. Gay, and Thomas A. Glass 1989 “Does Religious Commitment Contribute to Individual Life Satisfaction?” *Social Forces* 68:100-123.
- Flannelly, K.J., H.G. Kenig, C.G. Ellison, K. Galek, and N. Krause 2006 “Belief in Life after Death and Mental Health: Findings from a National Survey,” *Journal of Nervous and Mental Disease* 194:524-529.
- Flannelly, K.J., C.G. Ellison, K. Galek, and H.G. Kenig 2008 “Beliefs about Life-after-death, Psychiatric Symptomology and Cognitive Theories of Psychopathology,” *Journal of Psychology and Theology* 36:94-103.
- George, Linda K., Christopher G. Ellison, and David B. Larson. 2002. “Explaining the Relationship between Religious Involvement and Health.” *Psychological Inquiry* 13:190-200.
- 范鋼華・蕭新煌 2012 「宗教は心の安寧に寄与しうるか？——日韓台の比較から——」
園田茂人編『勃興する東アジアの中産階級』勁草書房：177-206。
- 稲場圭信 2011 「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』1(1)：3-26。
- 金児恵 2004 「日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響——ISSP 調査の日米データの2次分析から——」『死生学研究』春号：348-367。
- 金児曉嗣 1993 「日本人の民俗宗教性とその伝播」『心理学評論』36:460-496。
——— 1997 『日本人の宗教性——オカゲとタタリの社会心理学』新曜社。
——— 2011 「宗教とメンタルヘルス」金児曉嗣監修・松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良編『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版：141-163。
- 金児曉嗣・金児恵 2005 「文化と宗教」金児曉嗣・結城雅樹編『文化行動の社会心理学』：136-149。
- Kaneko, Satoru 1990 “Dimensions of Religiosity among Believers in Japanese Folk Religion.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 29:1-18.
- Keister, Lisa, Roger Finke and John McCarthy (eds.) 2012 *Religion Work and Inequality (Research in the Sociology of Work 23)* Emerald Group Publishing Limited.
- 菊澤佐江子 2001 「男女にみるエイジング・役割累積・ディストレス——社会的文脈としてのライフステージ——」『社会学評論』52：2-15。
- 小堀真 2011 「宗教と生活意識——公明党を支持する人々の生活評価の在り方——」
佐藤嘉倫編『現代日本の階層状況の解明——ミクロー・マクロ連結からのアプローチ——第3分冊社会意識・ライフスタイル』：141-154。
- Koenig, Harold G., D. E. King, and V. B. Carson 2012. *Handbook of Religion and Health*, 2nd ed. New York: Oxford University Press.
- Lim, Chaeyoon, and Robert D. Putnam 2010 “Religion, Social Networks, and Subjective Well-Being.” *American Sociological Review* 75(6):914-933.
- Liu, Eric Y., Harold G. Koenig, and Dedong Wei 2012 “Discovering a Blissful Island: Religious

- Involvement and Personal Happiness in Taiwan.”*Sociology of Religion* 73(1):46-68.
- Liu, Eric Y., and F. Carson Mencken. 2010 “Fatalistic Voluntarism and Life Happiness in Post-Socialist China.” *Sociological Spectrum* 30, no. 3:1-19.
- 松島公望 2011 『宗教性の発達心理学』 ナカニシヤ出版。
- 松谷満 2004 「社会意識の規定因としての宗教——「信者」層・「家の宗教」層・「無宗教」層の比較——」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』3 : 187-198.
- Miller, Alan S. 1995 “A Rational Choice Model of Religious Behavior in Japan.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 34(2):234-244.
- Mirowsky, John, and Catherine E. Ross. 2003. *Social Causes of Psychological Distress*, 2nd ed. New York: Aldine De Gruyter.
- 西脇良 2004 『日本人の宗教的自然観——意識調査による実証的研究——』 ミネルヴァ書房。
- Pescosolido, Bernice A. and Sharon Georgianna 1989 “ Durkheim, Suicide, and Religion: Toward a Network Theory of Suicide. ” *American Sociological Review*, 54(1):33-48.
- Pope, Whitney and Nick Danigelis 1981 “ Sociology’s One Law.” *Social Forces* 60(2):495-516.
- Roemer, Michael K 2010 “Religion and Subjective Well-Being in Japan,” *Review of Religious Research* 51(4):411-427.
- 佐々木尚之 2012 「JGSS 累積データ 2000-2010 にみる日本人の性別役割分業意識の趨勢——Age-Period-Cohort Analysis の適用——」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』12 : 69-80。
- Schieman, Scott 2010 “Socioeconomic Status and Beliefs about God’s Influence in Everyday Life.” *Sociology of Religion* 71:25-51.
- Schieman, Scott. 2011 “Religious Beliefs and Mental Health: Applications and Extensions of the Stress Process Model.” Pp. 179-201 in *Handbook of Mental Health and Mental Disorders: Perspectives from Social Science*, edited by David Pilgrim, Anne Rogers, and Bernice Pescosolido. Sage.
- Schieman, Scott and Jong Hyun Jung 2012 “Practical Divine Influence: Socioeconomic Status and Belief in the Prosperity Gospel.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 54(4):738-756.
- Schieman, Scott, Kim Nguyen, and Diana Elliot 2003 “Religiosity, Socioeconomic Status, and the Sense of Mastery.” *Social Psychology Quarterly* 66:202-21.
- Schieman, Scott, Tetyana Pudrovska, Leonard I. Pearlin, and Christopher Ellison 2006 “The Sense of Divine Control and Psychological Distress: Variations by Race and Socioeconomic Status.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 45:529-50.
- 宍戸邦章・佐々木尚之 2011 「日本人の幸福感——階層的 APC Analysis による JGSS

累積データ 2000-2010 の分析——」『社会学評論』62(3)：336-355。

Terazawa, Shigenori 2012 “Religiosity, Social Stratification and Life Satisfaction in Contemporary Japan.” A paper presented at Society for the Scientific Study of Religion and Religious Research Association Annual Meeting 2012, Hyatt Regency Phoenix, United States of America, 9 November.

横井桃子・川端亮 2013 「宗教性の測定——国際比較研究を目指して——」『宗教と社会』19：79-95。

渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也 2011 「日米の宗教概念の構造とその幸福度への効果：両国の共通性が示唆する普遍宗教性」『宗教と社会』17：47-66。